【翻訳続き】　　ジョン・ミルトン著

アレオパジティカ

（その２）

稲用　茂夫訳（教育福祉科学部）

[訳文][¶7途中から]

結局のところ、手に余るほどの書物がかれらの手に山積したならば、諸君は始終違反している印刷業者全員の名簿をせっせと作り、また嫌疑をかけられた印刷物の輸入をすべて差し止めなければならなくなる。要するに、諸君のこの命令が的確無欠のものであるためにはトリエント宗教会議やセビリア宗教裁判所の範にならって、これを完全に改革しなければならないが、そんなことをするのは諸君は大嫌いであることを私は知っているのだ。

神かけてそうでないことを祈るが、もし万一諸君があまんじてそんなことをしたとしても、その命令は諸君の意図した目的には沿わず、無益かつ不完全なものでしかないであろう。もし宗派や分派を防ぐためというのであれば、いやしくも書物を読みあるいは口移しにでも歴史を教えられたことのある者ならば、多くの宗派が書物を邪魔物であるといってしりぞけ、不文の伝統だけによって、その教義を長年の間混同させないで保持してきたという事実を聞いているはずである。キリスト教もかつては一分派に過ぎなかったのであるが、福音書も使徒の書簡も書かれない前にアジア全体に拡大していったことが知られている。もしも風習の改善を目指すというのであれば、イタリアとスペインをご覧あれ。この両国は厳しい審問を書物の上に課したにもかかわらず、それ以後少しでもより善良により正直により賢明により純潔になったでありましょうか。

[¶8]

この命令が当初の目的に沿わないことを明らかにするもう一つの理由を、あらゆる検閲官がもつべき資質という点から考えてみていただきたい。書物をこの世に送り出してよいかどうかという、書物の生死を掌握する裁判官たるべき人が勤勉、博学、聡明という点で他に抜きん出た人でなければならぬことは言うまでもないことである。そうでなければ、検閲を通過するかどうかの判定に容易ならない誤りが起きるかもしれないし、それはまた容易ならない損害を及ぼすことになる。仮に検閲官がその職にふさわしい立派な人であるとしても、書物やパンフレットをしかもしばしば膨大なものを、手当り次第に読み続けなければならないとすると、これほど退屈かついやな賃仕事はないだろうし、またその頭脳にこれほど大きな時間の損失を与えるものも他にはないだろう。いかなる書物であれ、手に取って見るには時期というものがあるが、しかしほとんど読むことのできない筆跡の、しかもそれがどれほど鮮明に印刷してあったところで、いつ読んでもどうしても３ページとは理解できないような書物をいつもむりやりに読ませられることは大きな重荷であり、時間と自分の仕事を大事にする人とか、あるいは単に趣味豊かな人の場合でも到底耐えられようとは思えない。

この点について私は、現在の検閲官の諸君は次のような状態にあると思うのであるが、こういう風に見ることを願わくは大目に見ていただきたいと思う。すなわち、かれらは疑

いもなく、議会に対する従順という建前からこの任務を引き受けたのであり、おそらく議会の命令とあらば、かれらにはすべてたやすく、苦労することはないものと見えたのであろう。しかし、しばらくやってみるうちに、かれらはもうすっかり疲れきってしまったのだ。それは検閲を乞うために続々と押し掛けてくる人々に対して、検閲官が言明し、釈明をするその言葉の中にはっきりと現れているのである。それゆえ、現在その職に就いている人々が明らかに御免こうむりたがっていること、また有能な人や時間の浪費を好まない人たちは、将来印刷物校正者として飯を食うつもりでもない限り、その後を継ごうとしないことなどから見ると、我々が今後期待できる検閲官はどんなものか、無知で尊大、怠慢な人間か、あるいは金銭的に卑しい人間か、容易に見当が付こうというものである．以上が私の言いたかったことであり、この命令が所期の目的に貢献できないという理由である。

[¶9]

最後に私は、この命令が好ましくない結果を生むということから一歩進んで、これが由々しい害毒を引き起こすものである点に説き及びたい。それはまず第一に、学問と学者たちに限りない失望と侮辱とを与えるということである。

兼任牧師を免官せよとか、教会の収益をもっと公平に分配せよとかという動機のうわさが少しでも耳に届くと、そうなればあらゆる学問は永久に打ち砕かれ、阻まれてしまうだろうというのが監督たちの愚痴であり嘆きであった。しかし、この意見に関しては、学問がその十分の一ほどでも聖職者階級と興亡を共にするなどと考えるべき理由を私は見出さないし、相当の資産を受け継いで所有している聖職者たちに対しては、欲の深い不似合いな言葉であると私は思わざるを得なかったのである。偽って学者面をする卑しい連中ではなく、明らかに学問のために生を享け、学問のため、すなわち欲得や何かのためでなく、神と真理に仕えるために学問を愛する人、またおそらくは、その発表労作が人類の幸福に貢献した報酬として神も人も認めるような、永遠の名声と賞讃とを得るために学問を愛する人、そういった自由にして怜悧な人たちを失望落胆させたくないと思うならば、諸君は次のことを心得ておくべきである。すなわち、学問において十人並みの評判をとり、しかも一度も罪を犯したことのない人の判断と誠実さを信頼せず、その人が分派活動をしたり、他人を堕落させたりするかもしれないから、教師や検査官なしで思っていることを印刷する資格はないと談ずるがごときは、自由で学識ある人にとっては、この上なく不愉快で侮辱的なことだということを。

我々が学校を卒業して教師のムチを免れたとたんに、今度は出版許可というムチの下に立たねばならないとしたら、すなわち我々がまじめに丹誠込めて書いたものを、あたかも学者先生の教えを受けているラテン文法学校の生徒の作文みたいに、迎合的で間に合わせな検閲官のぞんざいな検閲の目を経なければ発表できないとなったら、いったい一人前の大人になったとしても学校の生徒に比べてどれだけましなところがあるのか。自分の行動が信用してもらえず、その意図がはっきり悪いとわかってもいないのに、法律と処罰の危険に身をさらさねばならぬとすれば、生まれた共和国の中にありながら自分は愚か者か外国人くらいの評価しか受けられないと考えざるを得ないではないか。人がものを書いて世に問うという場合にはあらゆる判断力と思慮とを注ぎ込むものである。探求し、瞑想し、精励し、そしておそらく物分りのよい友人たちと相談して話し合う。そしてそういうこと

をすべてやり遂げた時には、自分の書くことがらについて、以前に書いた誰にも劣らない知識を持つに至ったと思うようになるものである。人が慎重な努力を傾け、真夜中も眠らず、知識の限りを尽くしたその成果を、その人よりも年下で、判断力もおそらく劣り、著作の労苦も理解しない多忙な検閲官の一瞥に供しない限り、この誠実と円熟さとを捧げ尽くした行為も、たとえ長年にわたる精進努力とそれにふさわしい才能があったという証拠があってもなお一人前には認められず、人々から不信と疑惑の目で見られるならば、またもし仮に検閲官からはねつけられたり、馬鹿にされるということがないにしても、保護者付きの子どものように、表紙の扉裏にこの著者は愚か者でも誘惑者でもないという保証と担保とを検閲官の手で付けてもらわなければ出版できないとなると、それは著者に対し、また書物に対し、また学問の特権と権威とに対し、名誉毀損以外の何ものでもないではないか。

もしも著者が想像力の豊かな人物で、検閲が済み、書物を印刷している間に、付け加えたいとと思うことがたくさん心に浮かんできたならばどうであろうか。こういうことは非常にすぐれて勤勉な作家にあってはしばしばあることで、おそらく一冊の書物で十数回はあるだろうが、その時はどうであろうか。印刷業者は検閲済みの原稿以外の仕事は決してしない。そこで著者は、この新しく付け加えたものを見てもらうために、許可を与えてくれる人のところへ重い足を運ばねばならない。さらに検閲官は同じ人でなければならないのでその人が見つかるか暇な時に出くわすまで何度も足を運ぶことになる。その間に印刷が棚上げになって大損害を被る、あるいは著者がそのすばらしい着想を失ってしまい、せっかく仕上げたものよりも劣った状態のままで世に送り出さねばならなくなるが、これは勤勉な作家にとっては何とも憂鬱なやりきれないことなのである。

自分が教え授けることを徹頭徹尾ローマ教皇みたいな検閲官から指導され、かれら自らの判断と称する狭い思い付きに合わないものは抹殺されたり訂正させられたりするようであったら、どうして人間は教育の生命たる権威をもって教えることができようか。また著者は当然その書物の権威者でなければならないのに、どうしてそれを望み得ようか。それならばむしろ沈黙を守るほうがましである。そんな場合には、鋭い読者なら誰でも検閲官の学者づらした検閲ぶりを一目見るなり、その書物を輪投げの輪みたいに投げ飛ばして、こう言うであろう。「私は教師見習いは嫌いだ。監督教師の権威をげんこつを振り上げて指導されながらやって来る見習いには我慢がならない。私は検閲官のことはまったく知らないが、確かにここにその横柄さを示す筆跡がある。この検閲官の判断力をいったい誰が保証してくれるというのか。」

すると書籍商が答える。「それはですね、国家ですよ。」すぐに（読者から）返事が返される。「国家が私の統治者であることは認めよう。だが、私の批判者ではないはずだ。検閲官が著者を見損なうかも知れないのと同じく、統治者たちは検閲官を選び損なうかも知れないではないか。ほら、これなどはくだらない書物だ。」さらに読者はフランシス・ベイコン卿の言葉、「このように認定された書物は、時代の言葉に過ぎぬものだ。」を付け加えてもよいであろう。というのは、検閲官がたまたま人並み以上に賢い場合でも（そうなるとその後を引き継ぐのは大冒険であるが）職権と任務にもとづいて検閲を通すのは、すでに一般に承認されているものに限るからである。

いやもっと悲しむべきことは、すでに亡くなった著者の作品が、生前あるいは今日に至るまでいかに有名であったにせよ、ともかく出版あるいは再版されるために検閲官の手元

に送られてきた場合である。その書物の中に熱情に駆られて書かれた過激な文章が一つでもあると（それが聖霊の書かせ給うたものでないとどうして言えよう）、それが検閲官の低劣な時代遅れの好みに合わない限り、たとえそれを語っているのが一国の宗教改革者ジョン・ノックス自身であろうとも、検閲官は削除させるであろう。こうしてこの偉大な人物の考えは、一人のおざなりな検閲官の恐怖心と無分別のおかげで，子孫の前に姿を消してしまうのである。このような非道が最近どの著者に対して加えられたか、忠実に出版しなければならない極めて重要な著書のどれに加えられたか、その実例を挙げることはできるのだが、これは適当な機会まで保留しておく。

さらにもし、こういう事態を救う力のある人たちがいち早く本気になって憤激することもなく、そのため、この汚らわしい錆みたいな連中が権威をほしいままにして、立派な書物のえり抜きの文章を散々につつきまわし、優れた人たちの死後、寄る辺のない遺作に対して背信的な裏切りをするようなことがあったら、それこそ運悪く、理性をもって生まれた不幸な人々はますます悲惨なことになるだろう。これから先勉強しようなどと思わないことである。世渡り上手以外のことなど考えないことだというのは、高尚なことは何も知らず、眼も向けず、徹底的に馬鹿で通すのが、確かに唯一の気安い生き方であるし、また歓迎もされることなのであろうから。

[¶10]

そしてこういうことは、とりわけ現存の有識者を蔑視し、死者の著作と記念物を徹底的に破壊することであるが、同時に私には全国民を見くびり誹謗することと思われる。イングランドのもつあらゆる発明、芸術、才能、まじめで堅実な判断力が、たとえどんなに優秀な人間でもわずか２０人の知力の中に含まれるほど軽蔑すべきものだとは、私には思えない。ましてやかれらに監督してもらい、かれらからふるいにかけてもらわない限り合格はできないとか、あるいはかれらが自ら印を押さなければ通用できないほどのものとは、どうしても私には思えない。真理とか理解力とかいうものは、受領証や証文や計量規定などによって独占され、取引きされる商品ではないのだ。我々は国内のあらゆる知識を重要商品並みに扱って、幅広ラシャや羊毛梱のように標識を付けたり検閲をしたりしてはならない。我々が四方八方から２０箇所の検閲鍛冶場に出向いて行かなければ自分の斧や鋤を研ぐことが許されないなどというのは、フィリスティア人が課した奴隷仕事（旧約サムエル記１３章）にそっくりではないか。

もし誰かが間違ったことや、正直な生活から見て恥ずべきことを書いて公けにし、その人の理性に対する世間の評価を濫用、失墜してしまった場合、そして有罪判決のあとで、今後はまず指定された役人から検査を受け、その署名を付けて、これは読んでも差し支えなしという信任を与えられたもの以外は書いてはならないという処罰がその人に下されたとすれば、それだけでもこれにまさる恥ずべき刑罰は想像することもできない。このようなわけで、全国民を、そしてそのような罪を一度たりとも犯したことのない人までも、こんなあやふやな疑惑に満ちた禁令のもとに閉じ込めておくということは、誠に恥ずべき仕打ちであることがはっきり理解できるのである。まして負債者や犯罪人が監視人なしで外を出歩いているというのに、罪もない書物が、表題部分に眼に見える看守をつけておかなければ世間に顔出しもできないなどなおさらのことである。

一般大衆にとってもそれは不名誉極まるものである。というのは、信用がおけないからといって、英語のパンフレットさえも読ませないほど大衆を疑いの眼で見るのだったら、それはとりもなおさず、かれらが思慮のない、堕落した、根性のない人間で、検閲官という管がなければ何も飲み込めないほど信仰と思慮とが病み衰えた状態になっているのだと非難しているわけではないか。これがかれらを慈しむゆえんである、という振りをするわけにはいかない。というのは、俗人を最も嫌い軽蔑しているあのカトリックの国でも、これと同じような厳しい取り締まりが行われているからである。それは決して賢明であるとは言えない。なぜならば、それでは検閲の破れ目をようやく塞ぐというもので、いやそれすらも塞ぎきれない。その間には堕落は、防ごうとしても、閉めることもできない別の戸口からいち早くどんどん入り込んでしまうからである。

[¶11]

結局のところ、それは我が国の牧師たちの不名誉ということにもなるのだ。福音書の光が現在もまた将来も世にあまねく、また絶えず説教が行われているというのに、新しいパンフレットの風がかすかにでも吹くたびごとに、信仰問答やキリスト教の歩みから足を踏み外してしまう無節操な烏合の衆が跡を絶たないというのは、牧師たちの努力と、その信徒が自ら刈り入れる成果にいまだ遺憾の点があるからである。牧師たちのあらゆる説教と聴衆に与える恩恵とがまるで軽蔑されて、会衆は3ページでさえも検閲なしでは自由に読む資格もないと考えられたり、また他の書物がすべて売れなくなるほどに膨大な数の説教集が伝道され、印刷され、世に出されておりながら、その説教書さえも出版許可（Imprimature）という聖アンジェロの城で保護されなければ、ナイフ1本ほどの小さなパンフレット（エンキリディオン）にも太刀打ちできないということであれば、牧師たちがひどく失望落胆するのも無理からぬ話である。

[¶12]

さて上院・下院の議員諸君よ、諸君が下した命令に学識ある人たちが失望しているというこの論証が、単なる美辞麗句に過ぎず、真実を伝えていないと諸君に向かって説く者があるといけないので、私は同じ審問が猛威を振るっている諸外国で見聞したことをお伝えしよう。私がそれらの国の学識ある人々と席を同じくする光栄をもった時のことである。私はイングランドのような学問的自由の国に生まれたことを幸福だとかれらに言われ、これに反して、かれら自身の学問が奴隷的状態に追い込まれているのをかれらはいたく悲しんでいたのだ。所詮それはイタリアの賢者たちの光栄を曇らせるものであり、もはや幾年もの間、書かれたものといえばお世辞と法螺話ばかりだとかれらは言うのであった。私が年老いた有名なガリレオを見出して訪問したのもこの地であったが、彼はフランシスコ修道会ならびにドミニコ修道会の検閲官たちの考えと違うことを天文学で考えたというので、異端審問所に捕われの身となっていたのである。私は当時イングランドが監督政治のくびきの下に呻吟していたのを知っていたが、それにもかかわらず、他国の人々がイングランドの自由をそれほどにも確信していたということは、とりもなおさず将来の幸福を約束するものだと考えたのである。

しかも私は、この世がいかに時代の変革を遂げても忘れられてはならない解放の指導者

たるべき立派な人たちが、当時イングランドの空気を吸っていようなどとは思いも及ばなかったことであった。異端審問所に対して外国の学識ある人たちが不平の言葉をもらすのを私は聞いたのであるが、イングランドで解放がいよいよ始まった時になって、議会開会中に国内の有識者たちが、それと同じ不平の声を検閲制度に対して発することになろうとは、私はいささかも懸念していなかったのだ。ところが図らずもその不平の声はあまねく行き渡ってしまい、私もその不平不満の仲間であることを明らかにするに至ったわけである。あの時もし思い上がった奴だと思われる心配がなければ、私はこうも言いたいところであった。「正直な会計官であるというのでシチリア人たちから慕われていた人(キケロー)は、かれらに懇願されて悪人のウェルレースを排撃したのだったが、実は私も、諸君を大いに尊敬し、かつ諸君からも親しまれ尊敬されている多くの人たちから、キケローに劣らない信頼を受け、学問に対する不当な束縛を取り除くため、私の考え得る正当な理由を遠慮なく述べるよう懇願されているのである。」

それゆえに、これは私個人の空想を吐露したものではなく、人々の心の中に真理を育て、人々から真理を受け入れようと並々ならぬ心構えと努力をしてきたすべての人々の共通の不平であるということが、以上で明らかであると思う。そして私は、この人々の名において、一般庶民の不平が何であるかを、味方にも敵にも隠すことなくさらけ出そうと思うのだ。もし異端審問所が復活して検閲が行われ、我々がその内容も知らないうちからそれぞれの書物を恐れ、１ページごとに紙のそよぐのも恐れるほど臆病かつ疑い深くなれば、あるいはまた最近まで口を封じられて説教もろくにできなかった人たちが、今度は我々の口を封じて、自分たちの好みに合わないものは読書もさせないというようなことにでもなれば、その人たちの意図しているのは第二の学問弾圧であると推測せざるを得ないし、司教と長老は、我々にとっては名実ともに同じであることが議論の余地なくはっきりする。

以前は２５か２６の監督管区から全国民にまんべんなく負わされていた監督制度の弊害が、今や学問の上に降り掛かってくるであろうことは、明らかである。というのは、今や学問に縁のない小教区の牧師が、いきなり大司教に昇進して書物を取り締まる大監督管区に君臨し、牧師職を退くどころか奇妙な兼任牧師としてそのまま居坐ろうとしているからである。つい最近までは新米の文学士たちへ聖職を授与する権限を一人で占有することを非難し、最も素朴な教区民にまでたった一人で支配権を振るうのは良くないことだと言ったその当人が、今度は自分の家で椅子にふんぞり返って、最も価値のある優れた書物と、それを書いた最も有能な著者たちとにこの両方の権限を振るおうというのである。我々がこれまでに作った国民契約も、誓言も照覧あれ。これは決して監督制度を廃止することにはならないのだ。かえってそれは、監督制度を交換することに他ならない。それは監督の邸宅を一つの領地から他の領地に移すことに過ぎない。これは悔悟の苦行を金で支払うという昔の教会規則のごまかしと同じである。無許可のパンフレットを見てすぐに驚き慌てるようでは，やがてはあらゆる秘密集会を恐れるようになり、やがてはまた、あらゆるキリスト教の会合を秘密集会にしてしまうことになる。しかし，正義と堅忍の法則が支配している国家、あるいは信仰と真実の知識の岩の上に建設され、基礎を置いた教会は、そんなに卑屈であるはずがないと私は信ずる。監督たちが異端審問から学び覚えた規律をさらにまた、監督たちからまねて、宗教上の制度がまだ出来上がらないうちに著作の自由を束縛して、一切を再び検閲官の胸の内に畳み込んでしまうというようなことになったら、疑

いもなく学識ある人たちや信仰ある人たちを皆、疑惑と失望の中に追い込んでしまうことになるだろう。この政略の狡猾さと、計略したのは誰であるかということを見抜けない者はいないであろう。司教たちがまだ駆逐されない間は、すべて出版は自由であった。この自由は議会開会中の国民の生得権であり、特権であり、光の照射であった。

ところが今、司教たちが廃止され、教会から追い出されてしまったかと思うと、あたかも我々の宗教改革が、かつての司教の席に別の名前で他人を迎え入れようとしたに過ぎないかのように、監督派的策略が再び芽生え始め、真理の壷からはもはや油を注ぎ出すことはなく、出版の自由は20人の監督派の会議のもとに再び束縛され、国民の特権は取り消され、さらに悪いことには学問の自由までもが再びうめき声を上げ、昔ながらの足かせをはめられなければならなくなったのだ。しかもこれらがすべてまだ議会の開会中の出来事なのだ。かれら自身がつい先ほど監督たちに対しての反対論議をし、抗弁しているのであるから、それを考えてもこのような暴力的妨害が、ほとんど当初の目的とは全く相反する結果を生み出すということ、宗派や分派を押さえつける代わりに、かえってこれを煽り立て、その評判を高くするばかりだということを思い出してしかるべきであるのに、このありさまである。セント・オールバンズ子爵（フランシス・ベイコン卿）は次のように言っている。「思うに、学者を処分すればかえってその権威を高め、著作を禁止すれば、真理は火花となって、これを踏みにじろうとする人々の顔にはね返るものだ。」

それゆえ、この命令は、かえって宗派争いを育てる乳母となるだろう。そしてこれが真理の継母となるゆえんを、私は容易に示すことができる。まず第一に、我々が既に知っている真理を維持することができなくなるということである。

[¶13]

我々の信仰と知識は、手足や身体などと同様、鍛錬によりたくましくなることは、いつも考えている人なら誰でもよく知っていることである。聖書には、真理を流れ出る泉にたとえてある。泉の水は絶え間なくこんこんと流れていなければ、妥協とか因襲のなどの泥沼に化してしまうのだ。人は真理の異端者となることもある。もしその人が、牧師がそう言ったからだとか、長老教会の最高会議でそう議決されたからということで、それ以外の理由は知らずに何かを信じているのだったら、たとえ信じていることが真実であっても、その人のもっている真理そのものは異端となるのである。自分の宗教上の負担と気苦労くらい、他人に喜んで譲り渡したいという人もいる。また一方（中部イタリアの）ロレットのカトリック信徒に劣らない真に盲目的な信仰の中に生涯を送るプロテスタント信徒や伝道者もあるということも、まぎれもない事実である。自分の快楽と営利に没頭している金持ちは、宗教というものは非常に込み入った、細かい勘定を必要とする取引きであると心得ているので、一切のややこしい仕事の中で、これだけはうまくやりくりすることのできないものと考えているのだ。では、その人はどうしたらよいのか。信心深い人だと言われたくもあるし、またその点で隣人たちに遅れを取りたくもない。そこで彼はやむなく、思い切って骨折ることは一切あきらめて、自分である代理人を見つけ出し、宗教上の業務一切をその人にまかせて世話してもらうことにする。それも有名でかつ尊敬もされている神学者でなければいけない。その金持ちは彼をしっかりとつかまえ、自分の宗教の倉庫のすべてを鍵とともにすべて彼の管理にゆだねてしまう。そして何と、この男の身体を自分の

宗教にしてしまい、彼と交際することによって自分の敬虔さが十分に立証され、賞讃を博するものと考えるのである。こうして彼の宗教は、もはや彼の心の中にあるのでなく、分けることのできる動産であり、かの善良な男が家に出入りするごとに、彼に近づいたり遠のいたりするのである。彼はその男をもてなし、贈り物をし、ごちそうし、そして彼を泊める。彼の宗教は夜ごとに家にやってきてお祈りをし、たっぷり夕食を食べ、深々とベッドに眠り、朝起きてあいさつをし、マームジーぶどう酒か何かの香り高い酒を飲んでから、ベタニアとエルサレムの間で朝の食欲をまだ青いイチジクで満たすほかなかった人（キリスト）よりも立派な朝食をちょうだいして後、８時には彼の宗教は出かけ、親切な歓待客をほったらかし、店で一日の間宗教なしで商売させておくのである。

[¶14]

さらにまた、こんな人たちもいる。「何事も命令されなければいけない。取り締まってもらい、決定してもらわなければいけない。真理を自由に語るにはいろいろな積み出し税が必要だが、これを取り立てる収税吏の税関を通過しなければ何も書いてはならない。」こういうことを諸君から聞くとたちまち諸君に屈服してしまい、諸君のお気に召すような宗教の服を裁断してしまう人たちだ。世の中には喜びもあり、気晴らしもあり、楽しい娯楽もあって、毎日の時の経つのを忘れさせてくれ、たいくつな一年を夢のように過ごさせてくれる。他人が特別に厳格にきちんと調達してくれようということがらに、何を好んで頭を悩ます必要があろうか。我々の知識が鈍感にも安逸をむさぼって停滞していると、こんな結果を国民の間にもたらしてしまうのだ。こんな従順な意見の一致というものは、何とご立派でおあつらえ向きのものであろう。それは何という立派な順応の中に我々を閉じ込めてしまうことだろう。疑いもなくこの順応は、真冬の氷に劣らぬ頑丈で固い骨組みをもっているものなのだ。

[¶15]

これが聖職者たちに及ぼす影響も決して感心したものではない。豊かな教会禄で報酬を受け、栄誉の極みにある教区牧師が、研究心を奮い起こさせるようなものが他に何もない時、英語の聖書索引と備忘録とまじめな学士程度の学殖と、対照福音書や引用句集などを巡り歩くことで手抜きをしたり、ありふれた教義題目とそれに合う用途、動機、特徴、方法などを付けてそれを繰り返す生活になるのも、決して今に始まったことではないのである。というのは、アルファベットや音階などと等しく、それらをいろいろとこね回したり、変えたり、継いだり、離したりすれば、聖書の注釈書や祈祷日課書や平信徒用祈祷集や，その他怠け者向きの小道具のお世話にならなくとも、わずかの学識と２時間くらいの瞑想とで、週１回分以上の説教を仕上げる準備が整うからである。

むつかしくないあらゆる聖句について、たくさんの説教がすでに印刷され、積み重ねられているが、それはロンドンで商売を営んでいる聖トマス教会や、はては聖マーティン教会、聖ヒュー協会に至るまで、その教区の境内ではあらゆる商品のうちで売れ行きが良いのである。だから牧師たちは自分の倉庫を十分満たす手段があるので、説教壇で準備が足りなくても少しも心配しないであろう。

［以下に続く翻訳文ならびに訳注は，紙幅のため次号に掲載の予定である］